

古着支援プロジェクト

国際協力NGOわかちあいプロジェクトが年に1度実施している古着支援プロジェクトを2015年も実施いたします。ご自宅で眠っている衣類がありましたら、私たちの支援活動にご協力ください。

第23回 2015年度古着募集要項

募集期間 2015年6月1日(月)～6月11日(木)
 ※この期間に必ず到着するようにお送りください。
 ※この期間以外に到着した場合はお受け取りできず、返送となる場合があります。

支援先と活用法

- タイのミャンマー難民キャンプ
- ヨルダンのシリア難民

皆様にとって頂いた古着は日本より船でそれぞれの国に運ばれ、現地で活動するNGOにより難民キャンプで生活する方たちに平等に配分されます。多くの方に配布できるように10,000箱を目指して募集しております。

古着の種類 **ズボン、Tシャツ、Yシャツ、トレーナー、ジャージ、カーディガン、セーターなど動きやすい普段着を中心に募集**

※夏服・冬服は問いません。
 ※大人用・子供用は問いません
 (乳幼児の服は特に貴重します)。
 ※洗った状態で、コンディションの良いもの
 ※下着、靴下、雑貨類不可

送付方法・送先 **衣類を段ボール(サイズの上限=縦・横・高さの合計が150cm以内)に入れて、以下の宛先までお送りください。(宅配業者の指定はありません)**

〒140-0003 東京都品川区八潮2-9
大井物流センター ジャパンエクスプレス内
わかちあいプロジェクト
 Tel: 03-3790-9672 (古着送付先倉庫)

※問合せ先ではありません。
 ※直接上記住所への持ち込みも可
 (営業時間: 平日 午前9時～午後5時)
 ※配送にかかる送料をご負担ください。

Tel: 03-3634-7809
 (古着に関するお問い合わせ先)

募金方法・注意点 **日本から現地までのコンテナ輸送費、通関費用、現地の運搬費用等に充てるため、古着1箱あたり1,500円の募金を頂いています。**

※募金は衣類に同梱しないようお願いいたします。
 ※古着だけのご支援は受け付けていません。
 ※以下、郵便振替口座またはクレジットカード決済をご利用ください。
 ※備考欄もしくは通信欄に「古着募金」とご記入ください。

郵便振替口座
一般社団法人わかちあいプロジェクト募金
00120-4-386390

クレジットカード
当団体HP(オンラインショップページ)よりカード決済が可能です。
 ⇒<http://wakachiai.shop-pro.jp>へアクセスし、
左側カテゴリの「募金ページへ」をクリック

現地受入団体 **タイ: TBC (The Border Consortium)**
ヨルダン: LWF (The Lutheran World Federation)

2015年の募金目的と目標額

目標額
1000
 万円

- ① 古着支援…目標箱数 10,000箱
 (古着プロジェクトにかかる国内外輸送費、活動費等)
- ② シリア支援(難民支援、緊急支援等)
- ③ 南スーダン支援
 (カクマ難民キャンプ、Peace Palette活動支援等)
- ④ ミャンマー支援
 (教育支援、自立プログラム等)

募金の送付先 郵便振替口座
一般社団法人わかちあいプロジェクト募金
00120-4-386390
 (※通信欄に上記より募金の種類をご記入ください)

わかちあいプロジェクトについて

フェアトレードや難民支援活動を通して、開発途上国の人々を支える国際協力NGOです。私たちは1992年にドイツを訪ねた際にフェアトレードのしくみを知り、日本で最初の国際フェアトレード認証コーヒー(カフェ・ママ)の販売を開始しました。世界中から製品を取り寄せ、国内では最も多くの国際フェアトレード認証製品を取り扱っており、様々な地域の生産者の自立につなげています。また同じ頃、アフリカ・ソマリア難民救援をきっかけに継続的に難民支援活動に取り組み、現在までアジアやアフリカ、中東の難民生活を余儀なくされる方々を支援しています。

- ① 国際フェアトレード認証製品の輸入、商品開発、販売
- ② 難民支援活動(古着支援、緊急支援)
- ③ 途上国の自立支援

活動の詳細はホームページよりご覧ください。
<http://www.wakachiai.org/>



広がりをもてる国際フェアトレード認証商品(わかちあいプロジェクト取り扱いの一部)



スタッフ(左下から)松木、和崎(左上から)浦野、戸嶋、中島

わかちあいプロジェクトNEWS No.30

2014 October (年1回発行)

編集 一般社団法人わかちあいプロジェクト

デザイン Design Convivia

発行元 一般社団法人わかちあいプロジェクト
 135-0001 東京都江東区毛利2-2-8誠和ビル
 TEL: 03-3634-7809 FAX: 03-3634-7808



わかちあいプロジェクト

フェアトレードは世界の豊かさを分かちあい共生する経済のしくみです

わかちあいプロジェクト NEWS No. 30

2014 October

古着を受け取り笑顔の難民の女性



世界の動向とともに変化する私たちの活動

和崎亜由美 わかちあいプロジェクトスタッフ

2014年はわかちあいプロジェクトにとってターニングポイントの年となります。

わかちあいプロジェクトは難民支援とフェアトレードを活動の柱としてこれまで20年余り、多くの国や地域の「支援」から「発展」に向けて活動してきました。

難民支援においては今年で古着支援活動は22回目を迎え、継続してきた事により多くの方に支えられ、ここ2～3年は約1万箱の古着が全国から寄せられるまでになりました。また昨年よりジャパン・プラットフォーム(JPF)のメンバーに加わり、より緊急性の高い地域への援助活動を開始しました。(支援活動の詳細は本ニュース内、見開きページ参照)

またフェアトレードでは、これまで日本国内で国際フェアトレード認証製品の普及や、販売することを主としておりましたが、私が入社してここ数年では製品の販売に加え、開発

途上国より原料を購入し国内のメーカーや職人さんにより製品化することや、企業と共同で商品開発するなどフェアトレード製品も多様化してきました。日本でもコーヒーや紅茶、チョコレートやスパイスなど、身近なところでフェアトレード製品を見かける機会が多くなりました。その中でもわかちあいプロジェクトで取り扱う国際フェアトレード認証製品は国内では最大の品数となっており、ナッツ、オイル、コスメ、ボールなどの他、毎年新しい製品を発売しています。最近では海外からの問い合わせも増えており、少しずつですが日本で製品化されたものを輸出するまでになりました。

社会情勢やニーズの変化により活動の幅が広がっていく中、この秋より新たにスタッフを加え、わかちあいプロジェクトは代表の松木を含め5人体制になりました。新体制になり活動内容の充実を図り、今後も難民、貧困、環境問題などの課題解決のため私たちは取り組んでいきます。世界の抱える問題はもはや他人事ではありません。

ミャンマー難民キャンプ

古着支援プロジェクト 配布報告

浦野 聖 わかちあいプロジェクトスタッフ

ミャンマーでは、政府軍と少数民族との間で起こった紛争や人権侵害から逃れるために人々がタイ側へ流出し、1984年に正式に難民キャンプが設立されてからちょうど30年となる現在も、約12万人もの人々が9つの難民キャンプで生活しています。

6月に全国の皆様からお寄せいただいた古着は、合計9,832箱にも上りました。皆様のご支援に心より感謝申し上げます。その古着の大半は、7月末にタイのバンコクに無事到着し、現地パートナー団体TBC (The Border Consortium) を通じて、ミャンマー難民キャンプにて配布させていただきました。8月下旬、このうち2つのキャンプでの配布に立ち会いました。

首都バンコクから国内便で1時間ほど移動したターク県にある、ウンビウム難民キャンプ (8月19日)、およびメラ難民キャンプ (8月20日) を訪問し、計6か所にて配布に立ち会いました。配布が行われている倉庫に到着すると、待っていたのは古着の入った段ボールの山と、その配布を心待ちにしているたくさんの方々の様子でした。

倉庫では、月に1回行われる食糧品等の配給と同様、世帯ごとに作成された配給台帳に基づいて、各家庭に人数分布されますが、受付、配給、運搬等のすべての作業は倉庫の管理責任者の下、組織化された難民の方々自らが「仕事」として行っています。古着を手にとった方々は、早速体にあててみたり、お互い見せ合ったり、思わず笑顔になったりと、日本から年1回届く古着が、大変重宝されていることを実感しました。膨大な配布数のため、受け取る方々は自ら古着を選べないものの、万一サイズや性別等が世帯のニーズに合わない場合は個人的に交換しているとのことでした。

各倉庫にてマネージャーや難民の方々にインタビューをしましたが、いずれも「日本の古着は質の良いものが多く、毎年大変感謝している」という声を多数伺いました。また、特にウンビウム難民キャンプは、標高もやや高い地域にあり、半袖では肌寒いくらいで、夏物に限らず長袖シャツや上着も必要であるとのことでした。また、小さい子どもがいる家庭も多く、引き続き子ども服についての需要も多いようでした。



配布立ち会い後にはキャンプ内を見学しました。今回初めて視察する私は、難民キャンプと聞いて、何も無いところにとだひたすらテントや小屋が立ち並び、食糧も配給に頼るのみ…という過酷な状況を想像していました。もちろん難民の方々の置かれた生活は容易いものではありませんが、今回の訪問で目にしたのは、笑顔で学校や図書館で過ごす子どもたち、軒を連ねる様々な商店、通りを行きかう人々、おしゃべりするお母さんたち一人々のごく普通の日常がある「コミュニティ」でした。しかしながら、インタビューの中で、「母国に帰れたら一番だけ、今はまだ安全ではないんだ」という意見や、「あなたの夢は？」という問いかけに「第三国定住すること」という答えが返ってきたときには、彼らの母国に一日も早く平穏が戻ることを願うばかりでした。来年も古着の募集を計画しています。皆様どうぞ協力をよろしくお願いいたします。

古着支援プロジェクトで集まった古着の一部はシリア難民に配布するため、8月末にヨルダンに到着しました。到着後、配布のための手続き等に1ヶ月程かかり、10月初旬に現地NGO10～12団体に配布予定となっております。その後、各NGO団体より難民の方々 (団体によってはホストコミュニティのヨルダン人の含む) に配布される予定となっておりますが、こちらはまた改めて報告させていただきます。



古着を受け取った男性とわかちあいプロジェクトスタッフ (浦野)



笑顔みせる難民の女性

キャンプ内の様子

シリア難民支援 ヨルダン北部での衛生キット配布

中島美穂 わかちあいプロジェクトスタッフ

シリアの内戦状態は解決の糸口が見えず、すでに61万人以上が助けを求めてヨルダンに避難しています。難民キャンプには大勢のシリア難民が押し寄せ、仮設住居に入ることができずテント生活をしている人々も多い状況です。わかちあいプロジェクトの現地パートナー、ヨルダンのLWF (ルーテル世界連盟) によりまずと約80%の難民がキャンプ外で生活しているといえます。

ヨルダン政府は、シリア難民に就労を認めていません。日々の生活はWFP (国連世界食糧計画) の食糧クーポンをはじめ、国連や国際NGOの支援に頼らざるをえません。さらに昨年、多くのシリア難民がキャンプの外で賃貸アパートを求めため、家賃の高騰が激しく、2部屋の狭いアパートに15人で住む難民や、家賃が払えずアパートを引越してテント生活を余儀なくされている難民も増えています。

こうした劣悪な生活環境、衛生面がおろそかになっている現状を少しでも改善できるよう、ジャパン・プラットフォーム



写真1 ● 衛生キットのの中身

ム^{※1}の支援を得て、衛生キット配布事業を実施しました。配布した衛生キットには、石鹸やシャンプー、歯ブラシ、洗剤など生活に不可欠な日用品10点が入っています (写真1)。1期目 (3月～5月) はヨルダン北部のイルビド県とマフラク県でのべ1446世帯に配布しました (写真2)。2期目は8月～10月の予定で1444世帯を対象としています。

※1: ジャパン・プラットフォームとは、NGO、経済界、政府が対等なパートナーシップの下、三者一体となり、それぞれの特性・資源を生かし協力・連携して、難民発生時・自然災害時の緊急援助をより効率的かつ迅速におこなうための国際人道支援組織で、わかちあいプロジェクトは2013年よりこのメンバーに加盟しています。



写真2 ● 衛生キットを受け取って喜ぶシリア難民

今後のシリア難民支援 教育支援 (学校修復・教室増築)

衛生キットの配布だけでなく、地元の学校に教室が足りないため、学校に通えないシリア難民児童が多いので、学校修復・教室増築事業へと活動を広げていく予定です。



男子小学校

南スーダン支援について

わかちあいプロジェクトが1990年代に支援したケニアにあるカクマ難民キャンプからつながりができた元南スーダン難民のディビットさん。現在は移民先のオーストラリアでNGO「Peace Palette」を立ち上げ、祖国南スーダンの子どもたちの安全な環境と人権を守り、彼らの可能性を実現させるため活動しています。私たちはディビットさんの活動に賛同し、7月に3000ドルを送りました。戦争孤児などのストリートチルドレンを救う目的でつくられたセンターで暮らす子どもたちの安全を守る活動に使われました。その他にも、1月にカクマ難民キャンプの運営を担うLWF (ルーテル世界連盟) を通じて3000ドル支援しました。

一日も早く南スーダンに平穏が訪れるようこれからも支援を継続していきます。

南スーダンの子どもたち。みんなボールで遊ぶのが大好きです。



ミャンマー教育支援について

私たちは引き続き、ミャンマー人女性のチャーさんの夢の実現に向けて協力していきます。

栃木県にあるアジア学院の元研修生チャーさんへ、祖国の山岳民のための学生寮の運営と児童養護施設の支援として、今年も5月に2000ドル送金しました。今後は自立のためのコーヒー生産プロジェクトにも協力していきたいと考えております。

ミャンマーの子どもたちと、右端がチャーさん

